

中世ヴァルド派詩編『崇高なる読誦』

有田 豊 (訳・注)

Abstract

Ce document est la traduction japonaise de *La Nobla Leiçon*, une poésie que les Vaudois de l'époque médiévale ont composée au 15^{ème} siècle. Il reste quatre manuscrits encore aujourd'hui : Cambridge (B), Cambridge (C), Genève et Dublin. Cette traduction vient de la version Cambridge (B). Il y a environ 480 lignes écrites en ancien occitan, et plus particulièrement celui qui se parlait dans la région des Alpes cottiennes. Nous pouvons trouver trois motifs dans ce texte : « la Bible », « la morale » et « l'Apocalypse ». Il est dit que ces motifs expriment la doctrine des Vaudois. Il y a beaucoup de recherches sur *La Nobla Leiçon* pour analyser les idées des Vaudois au Moyen-Âge ; ce document est le plus connu de leurs documents historiques. En avoir une traduction japonaise, c'est comprendre leur esprit et obtenir le point de vue d'une minorité religieuse du monde occidental.

Keywords : ヴァルド派, キリスト教, 教理書, 中世写本, ロマンズ語文献学

1. 『崇高なる読誦』について

『崇高なる読誦』*La Nobla Leiçon, La Nobla Leyçon, La Nobla Leyczon* は、中世期にヴァルド派説教師が著したとされる詩編の1つである。成立年代、執筆者、ともに明確な情報はないが、MONTET (1888) によれば「15世紀前半」、PAPINI (2003) によれば「1420年代ごろ」に成立したとされている¹⁾。現存する写本は4本あり、Cambridge (B) 写本、Cambridge (C) 写本、Genève 写本、Dublin 写本が該当する²⁾。写本の素材には、羊皮紙、犢皮紙、紙が使用され、当時のアルプス地域で使われていた古オック語で筆記されている。総行数や文章の形式は写本ごとに異なっており、全部で479行から492行ほどが韻文または散文で書かれている。そして、ヴァルド派説教師にとっての教理書としての性格を備えているという点が当該文書の持つ特徴であり、本稿はそのCambridge (B) 写本の邦訳である。

『崇高なる読誦』は大きく6つの段落に分けられる：①終末の接近 (1-138行)、②モーセの登場と古い法 (139-207行)、③イエスの誕生と新しい法 (208-266行)、④イエスの死と復活 (267-330行)、⑤墮落したキリスト者たち (331-438行)、⑥3つの法について (439-481行)。本文中では「(聖書における) 歴史」、「道徳 (法)」、「黙示」に関わる3つのモチーフが散見され、これらを分析することで中世ヴァルド派の教理がわかる内容となっている。1184年のヴェローナ公会議で「異

端者」とされたヴァルド派だが、元々はカトリック教会内部で生まれた教会改革運動の1つであり、その原点は聖書の記述を文字通り解釈・実践することにあった。そのため、「異端者」として急進的な思想を持っていたわけではなく、教理的な記述の典拠には、聖書だけでなくカトリック教会の教理に負っている箇所も見受けられる。

本文は、約4分の3を旧約聖書と新約聖書の概略が占めている(1-330行)。さらに、概略部分は3つの「法」に倣って分割されており、1つめはアダムの創造からユダヤ人のエジプトからの脱出までに関わる「自然の法」(ley natural, ley de natura)、2つめはモーセの十戒からキリストの誕生までに関わる「モーセの法」(ley de Moysent)、3つめはイエス・キリストの山上の垂訓から最後の審判のときまで続く「キリストの法」(ley de Yeshu Krist)が該当する。それぞれの「法」に沿って生きる者を善人、背いて生きる者を悪人として位置付け、前者をヴァルド派信者、後者をカトリック教会信徒に見立てた形で話が進んでいくのだが、これは「ヴァルド派こそが正統な使徒の後継者であり、真のキリスト者であり、選ばれた人々である」ということをカトリック教会に対して示す一種のマニフェストであった。聖書の概略部分はイエスの死後に使徒たちが迫害される場面で終わっており、この部分で原始キリスト教会の時代に迫害されていた使徒たちに、中世末期にカトリック教会から迫害されていたヴァルド派の境遇が投影されている。そして、353-354行における「聖人は迫害をせず、人を牢獄に入れることもない」という一文は、迫害されているヴァルド派が聖人であり、使徒の後継者であるという自負を表していると思われる。

2. 写本と校訂本

現存する写本のうち、最も古い版は、15世紀前半に成立したとされるCambridge (B)写本といわれている³⁾。羊皮紙に韻文で書かれているこの写本は、Cambridge University Libraryに所蔵されており、ヴァルド派への迫害が激化していた17世紀半ばにヴァルド派の谷を訪れた外交官Samuel MORLANDによって1658年に同図書館にもたらされた。長らくスペイン語の信心書として扱われてきたが、1862年に司書Henry BRADSHAWによってヴァルド派文書であることが確認され⁴⁾、19世紀における成立年代論争に大きな影響を与えた。同じくCambridge University Library所蔵のCambridge (C)写本は、15世紀半ばに成立したとされる⁵⁾。羊皮紙ではなく紙に散文で書かれており、大きさは85.52×63.70 mmと非常に小さい。また、この写本における詩編は*La Nobla Leyçon*のみで、冒頭の13行と14行目の最初の語しか含まれていない断片的なものである。続く古い版はGenève写本で、15世紀末ごろに成立したとされる⁶⁾。Bibliothèque Publique et Universitaire de Genèveに所蔵されており、犢皮紙に韻文で書かれている。Cambridge (B)写本と同じく、迫害が激化していた17世紀半ばに、当時のヴァルド派教会の議長を務めていたJean LÉGERによってもたらされた。4つの写本の中で最も新しいのがDublin写本で、16世紀前半に成立したとされる⁷⁾。Trinity College Library of Dublinに所蔵されており、紙に韻文で書かれている。17世紀前半にイングランド国教会の聖職者James USCHERによって同地にもたらされたといわれている。これら写本の校訂は、確認できる限りSamuel MORLANDの*The History of the evangelical churches of the Valleys of Piemont* (1658)における英

語との対訳版が初出である。ほぼ同時期には、Jean LÉGERが *Histoire générale des églises évangéliques des vallées de Piémont ou Vaudois* (1669) においてフランス語との対訳版を作成している。その後、19世紀における『崇高なる読誦』の成立年代に関する論争の中で RAYNOUARD (1817)⁸⁾、MONASTIER (1847)⁹⁾、MONTET (1888)¹⁰⁾、DE STEFANO (1909)¹¹⁾ らが続けて校訂版を出し、現在では PAPINI (2003)¹²⁾ に含まれるものが最新の校訂版となっている。

3. 凡例

1. 底本は、MONTET (1888) に収められた Cambridge (B) 写本の校訂版とした。また、数字や重要なキーワードが書かれた箇所に関しては、適宜 Cambridge (B) 写本のマイクロフィルム版で確認した。
2. Cambridge (B) 写本を翻訳するにあたり、DE STEFANO (1909) および PAPINI (2003) に収められている Genève 写本の校訂版、MONTET (1888) に含まれるフランス語訳、PAPINI (2003) に含まれるイタリア語訳も適宜参照した。
3. 韻文の行数は、訳者が便宜的に付したものであり、写本や校訂版で付されているものではない。
4. 聖書の引照箇所については、注に章節を記した。書名や章節番号、一部の表現等は、日本聖書協会発行の『新共同訳聖書』に基づく。
5. 文章を明確にするために訳文を補う必要があるときは、[] を用いた。
6. 本文における意味の類似した用語に関しては、校訂本の表記や現代語訳を比較し、次のように訳語を当てはめた——comendament：掟／deciplina：規律／dotrina：教理／eisemple, eyseple：教訓／escriptura, sancta scriptura：聖書／ley：法／leiçon, leyçon：読誦、聖書の内容、神の教え。
7. 各段落の題目は、訳者が便宜的に付したものである。なお、写本では飾り文字を使うことで段落の切れ目を明らかにしており、本訳の構成もその段落分けに準拠している。

4. 『崇高なる読誦』翻訳

終末の接近 (1-138 行)

- 1 ああ兄弟たちよ、ある崇高なる読誦に耳を傾けよ。
- 2 我々は現世が終末に近いことを知っているので、
- 3 幾度となく夜を徹して祈りを捧げねばならない。
- 4 我々は現世が終末に近づいていることを知っているので、
- 5 善行を積みたくて強く望むべきである。
- 6 時が記されてからというもの1400年が経ち¹³⁾、
- 7 それゆえ、今の私たちは終末の時期にいるのである。
- 8 終末の時に臨む我々は、みだりに欲を出すべきではない。
- 9 なぜなら悪の増加や善の減少において、
- 10 終末が現実のものとなる兆候を常々見ているからである。

11 こうした危機については、聖書が述べ伝えている通りで、
12 福音も、聖パウロも、同じことを告げているが、
13 生ける者は誰一人として自身の死期を知る術を持っていない。
14 今日または明日にでも自分たちに死が訪れるのかどうか
15 それさえ確実ではないのだから、我々はさらに恐れなくてはならない。
16 もちろん、最後の審判の日に至る際には、
17 悪行をはたらいた者、善行を積んだ人、その誰もが、
18 生前におこなった全ての所業の対価を享受するであろう。
19 我々は聖書が述べていることを信じねばならない。
20 善人が栄光に至り、悪人が苦悶に至るように¹⁴⁾、
21 全ての人は2つの道を通じて現世から離れていくということを¹⁵⁾。
22 ただ、この分別を信じていない人は、
23 アダムの誕生から現在に至るまでの
24 聖書の話に、冒頭から目を向けてみることだ。
25 そうすれば、アダムが知恵を持っていたかどうかがわかるだろう。
26 救われない者に比べ、救われる人は少数である。
27 しかし、善行を積みたいと望む人はみな、
28 まず、父である神の御名を口にし、
29 名誉ある彼の御子、つまり聖マリアの子と
30 我々に善の道を示してくれる聖霊に、
31 救いを求めなければならない。
32 これら3つは三位一体であり、
33 一なる神と同じように祈られるべき存在で、
34 全知、全能、そしてあらゆる善良さで満たされている。
35 我々が幾度となく祈り、必要とすべき神は、
36 死の前に我々が敵へと立ち向かい、
37 打ち負かすことができる力を授けて下さる。
38 その敵とは、現世であり、悪魔であり、肉体である。
39 また、真理へと続く道を知ることができ、
40 神が与えたもうた純粹なる魂のままでいられる
41 良識をも、善良な人には授けて下さる。
42 魂と肉体は、救いの途上にある。
43 神がお命じになったことから、
44 我々は三位一体を敬愛しているのと同様に、
45 善行を積む人だけでなく、悪行をはたらく者をも敬愛している。
46 それは死後、神が我々を栄光の館に住まわせて下さるという
47 確固たる希望を、天界の王に持つことなのである。
48 しかし、神の教えに含まれていることを実行しない人は、

- 49 神の聖なる屋敷に足を踏み入れることはないであろう。
50 当然ながら、金や銀を好み、
51 神との約束を蔑ろにするような悪人どもは、
52 教えの内容を実践しているとは思えない。
53 彼らは法も掟も遵守しておらず、
54 善人たちが誰も法と掟を遵守できないよう、
55 自らの権力でもって邪魔をするのである。
56 なぜ、このような悪が人類の間に跋扈しているのだろうか。
57 それは、創世以来、アダムが犯した罪に起因する。
58 アダムが禁忌を無視して、りんごを食べてしまい¹⁶⁾、
59 彼を発端とする悪が、子孫の間に連鎖しているのである。
60 アダムは、自身と、後に続く人々に、死をもたらした。
61 我々は悪の端緒が彼にあったと明言できる。
62 だが、キリストが自身の受難によって善人たちをお救いになられた。
63 ゆえに、我々は聖書において知っている、
64 アダムが自身の創造主である神に対して無信仰であったことを。
65 また、現在の人々は、さらなる悪に染まっていることがわかる。
66 彼らは、全能の父である神を見限り、
67 自身の破滅のために偶像を崇拜している。
68 偶像崇拜は、創世時にあった法が禁じているものである。
69 「自然の法」と呼ばれるそれは、全人類に共通しており、
70 神が最初の被造物であるアダムの心に据えられたものである。
71 神は善行もしくは悪行ができる自由を被造物にお与えになったが、
72 アダムには悪行を禁じ、善行を命じられた。
73 特段の理由なく自身の弟であるアベルを殺した
74 アダムの最初の息子カインのごとく、
75 我々は善を放置し、悪を実行したため、
76 あなたは悪が残されていることを、明確に確認できるのだ。
77 ただ、カインは善人だったので、
78 他の被造物ではなく、主に対して信仰を持っていた。
79 ここに、我々が度を越して腐敗させてしまった
80 自然の法の教訓を見て取ることができる。
81 我々は創造主に対して罪を犯し、被造物を侮辱してしまった。
82 神は我々に崇高なる法をお与えになり、
83 各々の心の中に刻み込んで下さった。
84 聖書の中には見当たらないが、その法とは、
85 公正な道を判別し、それに沿って歩み続け、
86 どんな被造物よりも神を心の中で愛し、

- 87 際限なく神を畏れ、神に仕え、
88 結婚という高貴なる約束をしっかりと守り、
89 兄弟たちと仲良く暮らし、全ての他者を愛し、
90 傲慢さを嫌い、謙虚さを好み、
91 人にしてもらいたいと思うことを他の人にもせよというものだった。
92 もし逆のことをした人は、罰を受けた。
93 法を守った人は少数だったが、
94 法を犯した人は多数いた。
95 彼らは主を見限り、敬意を払わず、
96 悪魔を信じ、その誘惑に負けて、
97 天国よりも現世の方を過剰に好み、
98 魂よりも肉体の欲望を満たしたのである。
99 そうして多くの人が死んでいったことを、我々は知っている。
100 「神は、人を死なせておくために、人類を創造されたのではない」
101 このように口にする人は、全てやりなおすことができる。
102 洪水が押し寄せて不忠者どもを一掃してしまったことから、
103 法を犯した人への罰が自分にも起こらないよう注意するのが望ましい。
104 善人たちを困い込むため、神は一艘の方舟を作らせた。
105 悪行が大いに増え、善行が大いに減ったがゆえに、
106 救済された者は、世界全体で8人しかいなかった¹⁷⁾。
107 こうした神の判断において、我々は次の教訓を得ることができる。
108 悪を背負っている我々は、等しく悔悛しなければならない。
109 なぜなら、聖ルカが伝える通り、イエス・キリストがこう口にしたからである、
110 「悔い改めない人々は、みな滅びるであろう」と。
111 一方、難を逃れた人々には、神が次のように約束された、
112 「洪水によって肉なる者が滅ぼされることは二度とないだろう」と。
113 以来、人口は増加し、何倍にも膨れ上がった。
114 人々は、神が施して下さった善について、あまり覚えておらず、
115 信仰が弱まれば弱まるほど、恐怖心が大きくなっていった。
116 主の言葉をあまり信じていない人々は、
117 洪水が再び世界を飲み込んでしまうことを危惧し、
118 自分たちが避難するための塔を作ろうと言った¹⁸⁾。
119 その決定に従い、彼らはただちに塔を作り始めた。
120 また、それを広く、とても高く、とても大きくしようと言った。
121 こうした行為が神を立腹させ、人々に怒りを示されたので、
122 彼らの塔は空にまで到達していたが、それ以上は作られなかった。
123 塔が建てられた大都市の名はバビロニアというものだったが、
124 人類の背徳的行為が原因で、今では「バベル」(混乱)と呼ばれている。

125 当時、人々の間には1つの言葉しかなかったが、
126 彼らが作り始めた塔を、もう作らないようにと
127 神がそれを乱されたので、人々は互いに理解しあわなくなり、
128 言葉は世界中へと広まっていった。
129 後に彼らは法を放棄するという重罪を犯した、それは「自然の法」である、
130 このことは聖書が伝えていて、しっかりと立証できる。
131 悪事をはたっていた5つの町が壊滅したように¹⁹⁾、
132 神は火と硫黄でもって彼らを断罪し、
133 不忠者たちを一掃し、善人たちをお救いになった。
134 その善人たちとは、天使が町から逃がしたロトと彼の家族である。
135 彼らは全部で4人いたが、うち1人は断罪されてしまった。
136 その1人は彼の妻だった、なぜなら彼女だけが禁忌に反して振り返ったからだ²⁰⁾。
137 こうして全人類は大きな教訓を得る、
138 それは「神が禁じるものは遵守しなければならない」ということである。

モーセの登場と古い法（139-207行）

139 当時、神の御心に留まり、ユダヤ人たちの族長を生み出した
140 アブラハムという人物がいた。
141 ユダヤ人たちは、神を畏れる高貴なる人々だった。
142 エジプトにおける彼らは他の悪しき者どもの内で暮らしており、
143 当地で長らく虐げられ、強制労働をさせられていた。
144 そこで主に祈りを捧げたところ、かの民衆を救い出し、
145 悪しき者どもを滅ぼすようにと、主がモーセを遣わされた。
146 民衆は、乾いた地を通るようにして紅海を渡ったが、
147 彼らを追いかけてきた敵たちは、そこで全員死んでしまった。
148 民衆のために、神は他にも多くの徴を残して下さった。
149 40年もの間、彼らを砂漠で養い、法を授けて下さったのである。
150 その法は、モーセを通じ、刻印された2枚の石板で伝えられた。
151 民衆は、それが気高く、理路整然と記されていると感じた。
152 法は、全人類のために主が存在することを示しており、
153 「人は、神を信じ、心の底から愛し、
154 恐れ、死の際まで仕えなければならない」と伝えていた。
155 また「各々、神と同じように汝の隣人を愛し、
156 未亡人たちに手を差し伸べ、孤児たちを養育し、
157 貧者たちを迎え入れ、裸の人たちに服を着せ、
158 飢えている人に食事を与え、迷っている人を連れ戻し、
159 神の法をととても大切に守らなければならない」とも伝えていた。
160 神は、法を守る人々に、天上の王国を約束して下さる。

- 161 神は人々に次のものを禁止されている——偶像崇拜,
162 殺人, 姦淫, あらゆる肉体関係,
163 嘘をつくこと, 誓いに背くこと, 偽証,
164 高利貸し, 横領, 不純な欲望,
165 吝嗇, 裏切り行為全般。
166 神は, 善人たちに生を, 悪人どもに死を約束された。
167 当時, 罪を犯し, 品行の悪かった人々は,
168 許しを与えられないまま死に至り, 滅ぼされてしまったので,
169 神が治める土地には正義があった。
170 それは聖書が伝えており, 極めて明白である。
171 砂漠に残った 30,000 もの人々²¹⁾,
172 法が伝えるには, 30,000 以上もの人々が,
173 剣, 炎, そして蛇によって殺されたという²²⁾。
174 さらに, 他にも多くの人々が皆殺しにされた。
175 地面が裂け, 地獄が彼らを飲み込んだのだ。
176 我々は自らの節度の欠如について互いに諫め合うことができる。
177 もちろん主の意向に沿った人々は,
178 約束の地を授かった。
179 当時は, 高貴なる人々がたくさんいた。
180 それはダヴィデやソロモン王,
181 イザヤ, エレミヤ, さらに他の多くの人物たちのことであり,
182 彼らは法のために戦い, それを遵守していた。
183 世界中から選ばれた人々が神の御許にいた。
184 その周りには, 彼らを迫害する敵たちが数多くいた。
185 聖書において, 我々は大きな教訓を得ることができる。
186 「彼らが法や掟を遵守しているうちは,
187 神が彼らのために他の者どもと戦って下さっていたが,
188 彼らが罪を犯したり, 品行が悪かったりしたときは,
189 他の人々によって殺され, 滅ぼされ, 掠奪された」と。
190 人口が大いに増加し, 豊かな富によって満たされるようになると,
191 人は自らの主に対して反抗心を抱くようになった。
192 そこで, バビロニアの王が人々を牢獄に入れたときのことを,
193 我々は聖書において知るのである²³⁾。
194 当地で彼らは長らく虐げられ, 強制労働をさせられていた。
195 そして, 彼らは悔悟の念をもって主に祈りを捧げた。
196 すると, 神は彼らをエルサレムへとお戻しになったのである。
197 法を遵守する少数の従順な人たちは,
198 自分たちの王に背くことを恐れていたが,

- 199 大きな過ちに満ちた人は誰もいなかった。
200 その人とは、ファリサイ派の人々と他の律法学者のことである。
201 さらになる榮譽を得るため、人々が彼らを見習っていたことから、
202 彼らが法を遵守していたことは非常に明白である。
203 ただ、すぐに終わりを迎えるこの榮譽には、あまり価値がない。
204 聖人、正直者、善人といった人たちは迫害されており、
205 彼らは悲しみと嘆きを抱えながら主に祈っていた。
206 人類の全家系が破滅へと向かっていたことから、
207 現世を救うため、主が地上へと降り立たれたのである。

イエスの誕生と新しい法（208-266 行）

- 208 神は、王族の家系の、ある高貴なる少女の許に天使を遣わした。
209 天使は、礼儀正しく、優しく彼女に挨拶した。
210 そして、彼女にこう言った。「マリアよ、恐れることはない。
211 そなたは神から恵みをいただいた。
212 そなたは身ごもってイエスと名付ける男の子を産み、
213 彼は人が犯した罪から民草を救うだろう」と²⁴⁾。
214 名誉ある処女は、9ヵ月にわたって彼を身ごもったが、
215 彼女が非難されることはなく、ヨセフと結婚した。
216 聖母マリアは純潔だったし、それはヨセフも同じである。
217 福音が伝えていることなので、我々はそれを信じねばならない。
218 そして、子どもが生まれると、夫婦は彼を飼い葉桶に寝かせ、
219 産着で包んだ、こうして彼は貧しく夜を明かしたのである。
220 ここで、強欲者や守銭奴どもが、
221 夫婦の財産が増えることを阻止しようとするようになる。
222 主が誕生した時には、数多の奇跡が起こり、
223 神はそのことを告げる天使を、羊飼いたちの許に遣わした。
224 東方では、1つの星が3人のマギの許に出現した²⁵⁾。
225 天では神に栄光が与えられ、地では善人に平和が与えられる。
226 その後、善人たちは迫害を受けたが、
227 神の恩寵により、イエスは年を経るごとに成長し、
228 自身が学んだ神の英知を修得していった。
229 そして、彼は選び抜かれた12人の使徒たちを集めた。
230 彼は、かつて神が与えた法を変えたかったのである。
231 ただ、放棄された法に変更を加えるのではなく、
232 みながよりしっかりと遵守するよう、それを刷新することにした²⁶⁾。
233 救済を与えるため、彼は洗礼を受けた。
234 その時すでに刷新は始まっていたので、

- 235 人々に洗礼を施していた使徒たちに向けて、イエスはこう言った。
236 「古い法は、姦淫を為すことを重々禁じているが、
237 新しい法は、[他人の妻を]見て欲情することを咎めている。
238 古い法は、離縁状を渡す義務があるとはいえ、
239 離縁することを認めているが、
240 新しい法はこう述べている、離縁しないように、
241 また、神が結びつけられたものを誰も別れさせないように、と。
242 古い法は、子どもを産まなかった女性に罰を与えるが、
243 新しい法は、貞操を守ることを勧めている。
244 古い法は、偽りの誓いを立てることのみ禁じているが、
245 新しい法はこう述べている、一切の誓いを立ててはならず、
246 汝の話し方は『然り』と『否』、それ以上にはならないように、と。
247 古い法は、敵と戦い、『目には目を、歯には歯を』と命じているが、
248 新しい法はこう述べている、復讐を望んではならない、
249 復讐は天上の王に委ね、
250 汝に仇なす者どもを平穩に生かしておくように、と。
251 さすれば、汝は天上の王からの許しを得るだろう、と。
252 古い法は、隣人を愛し、敵を憎め、と述べているが、
253 新しい法はこう述べている、今やそうしなくていい。
254 敵を愛し、汝を憎む者に善行を施し、
255 汝を迫害する者、非難する者のために祈りなさい、
256 あなたがたの天の父の子となるために。
257 古い法は、悪事を犯した者どもを罰することを命じているが、
258 新しい法はこう述べている、全ての人に赦しを与えなさい、
259 さすれば、汝は全能の父からの赦しを得るだろう、
260 もし汝が赦しを与えなければ、汝が救いを得ることはないだろう。
261 誰しも、人を殺すべきでなく、憎むべきでもない。
262 我々は、愚直な人や貧しい人を軽蔑すべきでなく、
263 他国出身の異邦人を下劣に扱うべきでもない、
264 なぜなら現世において、我々はみな巡礼者であり、
265 みな兄弟なので、等しく神に仕えなければならないからだ」と。
266 これが我々に遵守せよとイエス・キリストの仰った新しい法である。

イエスの死と復活 (267-330 行)

- 267 イエスは使徒たちを呼び寄せ、彼らに命を下された。
268 「世界の隅々にまで赴き、民衆に教育を施し、
269 ユダヤ人、ギリシャ人、そして全人類に説教をして回るように」と。
270 イエスは、使徒たちに蛇に対抗する力をお与えになった。

- 271 使徒たちは、悪魔を追い払い、病人を治療し、
272 死者を蘇らせ、中風の人を清め、
273 イエスが使徒たちにされたように、他者にも施しを与えていた。
274 彼らは、金も、銀も、持っていなかったが、
275 食料と衣服には事足りていて、
276 互いに愛し合い、仲良く暮らしていた。
277 ゆえに、イエスは彼らに天上の王国を約束された。
278 霊的な貧しさを持っている人にも²⁷⁾、同様に約束された。
279 無論、彼の考えを知っている人も、その数に含まれるだろう。
280 真の意志によって清貧であろうとする人々も同様である。
281 ほどなくしてイエスは死に、その後、蘇るはずだったので、
282 使徒たちにこれからのことをお告げになった。
283 イエスは彼らに、自身の死の前に現れるはずの
284 徴や証しを示された。
285 彼は使徒たちや人々に、新約聖書に記されている
286 数多くの美しいたとえ話をされた。
287 ただ、もし我々がキリストを愛し、彼の教理を知りたいと望むのであれば、
288 我々は夜を徹して聖書に目を通さなければならない。
289 そして、聖書を読み終えたとき、我々は知ることになるだろう、
290 キリストは、善行を積んだという理由のみで迫害されたのだと。
291 神の力によって、イエスは死者を蘇らせたり、
292 全く目が見えなかった盲人の目を見えるようにしたり。
293 中風の人を清めたり、口の利けない人を癒したり、
294 悪魔を追い払ったりと、多くの奇跡をやり遂げていた。
295 そして、善行を積み重ねるほど、彼は迫害されたのである。
296 彼を迫害していたのは、ファリサイ派の人々、
297 ヘロデ王の臣下、そして他の聖職者たちだった。
298 民衆がイエスに付き従い、彼自身や彼の言うことを信じていたので、
299 彼らはイエスのことを妬んでいたのである。
300 彼らはイエスを過酷な拷問にかけ、殺すことを企てた。
301 その話をユダに持ち掛け、取り決めを交わした。
302 「もし我々にイエスを引き渡せば、銀貨30枚を支払おう」と²⁸⁾。
303 ユダは強欲者なので、裏切り行為におよび、
304 自身の主を悪しき人々に引き渡してしまった。
305 イエスを磔刑にしたのは、ユダヤ人たちだった。
306 彼らはイエスの両手と両足を釘で強く打ち付け、
307 頭にいばらの冠を載せ、
308 多くの非難を浴びせながら冒涇した。

- 309 「わたしは渴く」とイエスが言うと、彼らは酸いぶどう酒を飲ませた。
310 拷問は辛く、苦痛を伴うものだったので、
311 イエスの魂は、罪人たちを救うために身体から離れていった。
312 そして、十字架に吊るされた身体は、
313 2人の盗賊たちの間に残ったのである。
314 ユダヤ人たちはイエスの身体に4つの傷をつけたが、
315 とどめをさすために、1人の兵士がやってきて、
316 脇腹に穴を開け、5つめの傷をつけた。
317 すると、血と水が混ざり合って一緒に出てきた。
318 使徒たちは全員逃げだしてしまっただが、1人だけが戻ってきて、
319 十字架のそばにいた2人のマリアと一緒に²⁹⁾、その場に留まった。
320 みな大いなる嘆きに包まれていたが、特に聖母マリアが嘆いていた³⁰⁾。
321 彼女は十字架上の息子が、裸で、傷つけられ、死ぬのを目にしていたのだから。
322 イエスは善人たちによって埋葬され³¹⁾、不忠者どもによって監視された。
323 彼は、地獄から自身の弟子たちを引き寄せ、3日目に復活し、
324 弟子たちに予め伝えておいたように、彼らの目の前に現れた。
325 彼らは、主を目にすると大いに歓喜し、
326 初めはとても恐れていたが、元気づけられた。
327 昇天の日まで、イエスは彼らと語り合った。
328 その後、我らが救世主は、栄光のうちに天へと昇られ、
329 使徒と信奉者たちに向けて、次のように述べられた。
330 「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。

墮落したキリスト者たち (331-438 行)

- 331 ペンテコステの時期になると、イエスは彼らのことを思い出し、
332 魂の救いとなる聖霊を彼らに遣わし、
333 神の教理でもって使徒たちを教育し、
334 彼らは言葉と聖書を知ることとなった³²⁾。
335 すると、主の仰ったことが、彼らの頭に浮かんだのである。
336 彼らは、恐れることなく、キリストの教理を伝えてまわり、
337 多くの徳を積みながら、ユダヤ人とギリシャ人たちに説教をし、
338 イエス・キリストの名において、信者たちに洗礼を施していった。
339 そして、民衆は新たな改宗者となったのである。
340 彼らはキリストと共にあったので、キリスト者と名付けられた。
341 さて、ここで我々は、聖書が述べ伝えていることを知る。
342 ユダヤ人とサラセン人たちが、キリスト者たちを激しく迫害していたことを。
343 ただ、主が心配する中でも、使徒たちはとても強くあった。
344 そして、彼らは自らと共にいた男や女たちに対して、

- 345 [キリストの教えを] 実践したり、語ったりすることをやめなかった。
346 ユダヤ人とサラセン人たちは、キリストにしたように、多くの人々を殺した。
347 記録によれば、彼らの苦痛は過酷であったという。
348 彼らは唯一イエス・キリストが辿った道を体現していた。
349 ただ、彼らを迫害した人々は、さほど咎められるにはおよばなかった。
350 彼らは、我らが主イエス・キリストへの信仰を有していなかったからである。
351 現在、非難したり、大いに迫害している人々も同様に、
352 彼らはキリスト者であるべきだが、とてもそうは見えない。
353 しかし、聖人たちが誰かを迫害したり、
354 投獄するなどということは、聖書のどこにも見当たらないので³³⁾、
355 このように迫害する人々は非難され、善人は激励されうるのである。
356 もちろん、使徒たちがいなくなった後にも、誰かしら教父がいて、
357 我らが救世主イエス・キリストの生涯を述べ伝えてはいた。
358 また、現在においてもなお、
359 ほんの一握りの人々にしか知られていない誰かがいる。
360 彼らはイエス・キリストの生涯を伝えたいと非常に強く望んでいる。
361 ただ、彼らは迫害されているので、それは少ししかできない。
362 偽キリスト者どもには罪によって盲目になっている者が多く、
363 また、牧者である人たちよりも多数派である。
364 彼らは、善人たちを迫害し、命を奪い、
365 不誠実な嘘つきどもを平和のまま生かしておくのだ。
366 無論、彼らは信者たちの財産しか好んでいないので、
367 善き牧者たちではないと、ここで知ることができる。
368 それは聖書が述べているし、我々も理解できることだ。
369 もし神を愛し、イエス・キリストへの畏敬を欲する善人で、
370 恨んだり、誓ったり、嘘をついたり、
371 姦淫したり、人を殺めたり、他者から奪ったり、
372 自身の敵に復讐したりといったことを望まない人がいるとすれば、
373 その人は「*vaudes*」であり³⁴⁾、罰するにふさわしいと彼らは言う。
374 また、[*vaudes* が] 辛苦を通じて得ているものを奪ってしまおうと、
375 彼らは嘘や欺瞞を使って [*vaudes* を] 罰する理由を探すのである。
376 しかし、主への畏敬が原因で迫害されている人々は、とても勇気づけられている。
377 なぜなら、この世を後にする折、その人々には天上の王国が用意されていて、
378 たとえ迫害を受けたとしても、後に大いなる栄誉を手にするからだ。
379 その点で、偽のキリスト者どもの不健全ぶりは極めて明らかである。
380 恨んだり、嘘をついたり、誓ったり、
381 高利で貸付をしたり、人を殺めたり、姦淫したり、
382 自らに害をなす人々に復讐したりする、

- 383 そんな人物を、誠実で、公正であると、彼らは言うのだ。
384 ただ、そんな人でも、死後に地獄に落とされぬよう用心はしている。
385 重病にかかって死が目前となり、殆ど話も出来ないときに、
386 その人は司祭を求め、罪を告白することを望むのである。
387 しかし、「健全かつ元気なときに告白せよ、死の時を待つのではない」³⁵⁾
388 と命じている聖書からすれば、それでは遅すぎる。
389 司祭はその人に、一切の罪を犯さなかったかどうか尋ねる。
390 その人は二言、三言で答え、すぐに赦しをくれるよう催促した。
391 司祭は、その人にしっかりと告げる。「汝の罪は赦されない、
392 もし他者の持ち物を全て返さず、自身の過ちをよく悔い改めないのであれば」。
393 ただ、もしその人がお告げを聞き、熟考し、
394 自分で考え、他者の持ち物を全て返却するとしたら、
395 その人の子どもには何が残り、周りの人々は何と言うだろうか。
396 その人は、過ちを悔い改めるよう自身の子どもに命じ、
397 自分の罪は赦されるよう司祭と契約を結ぶのである。
398 もしその人が他者から搾取した100ないしは200リーヴルを持っていても、
399 100スーほど支払えば司祭は罪を赦し、
400 100スー以上持っておらず、より少ない場合であっても、
401 その人に説諭を与えては、赦しを約束するのである。
402 その人は、自身と両親に対するミサを行うよう [子どもに] 求めなければならず、
403 司祭は、彼らが正しくても、罪があっても、赦しを約束する。
404 司祭は、その人の頭の上に手を添えて
405 その人が司祭に多くのものを残せば、より盛大な儀式をとりおこない、
406 赦しは十分に与えられたと、その人を納得させるのだ。
407 だが、司祭が過ちを為した人々は、不正に悔い改めさせられており、
408 その人は、不正に基づく赦免の儀式に騙されていることになり、
409 その人に赦しを信じ込ませた人々も、大罪を犯したことになる。
410 私はあえて言う、それは事実であると。
411 シルヴェステルから今日に至るまでの³⁶⁾、あらゆる教皇、
412 あらゆる枢機卿、あらゆる司教、あらゆる修道院長、その全員が、
413 罪を赦したり、赦免したりできる能力を持ってはいない。
414 あらゆる被造物に対して、たった一つの大罪さえも赦せないのだ。
415 神のみが赦しを与えることができ、他者はそれができないのである。
416 しかし、牧者である人々には、為すべきことがある。
417 彼らは、民衆に説教を施し、祈祷に身を捧げ、
418 神の教理を通して幾度となく教育し、
419 規律を与えつつ罪人を罰しなければならない。
420 罪人が悔悟の念を持ってこそ、真の説諭なのだから。

- 421 はじめに、正しく告解を行い、
422 現在の人生における後悔をし、
423 断食し、施しを行い、情熱的な心でもって祈りをささげる³⁷⁾。
424 こうしたことを通じて、罪人は救いを見つかるであろう。
425 罪を犯した悪しきキリスト者である我々は、
426 畏敬の念も、信仰も、慈悲の心も持っていないがために、
427 イエス・キリストの法を放棄してしまった。
428 我々は告解しなければならず、それを後回しにすべきではない。
429 涙と悔悛の心でもって、我々は悔い改めなければならないのである。
430 我々が犯した3つの罪は、
431 羨望による強欲、肉体の快樂
432 生涯の高慢——これが我々の犯した悪事である。
433 我々が辿るべきは、次のような道である。
434 もし我々がイエス・キリストを愛し、付き従いたいと願うなら、
435 心の靈的な貧しさを獲得し、純潔を愛し、
436 つつましく神に尽くさなければならない。
437 そうすれば、我々はイエス・キリストの歩んだ道を辿るだろうし、
438 結果として、我々の敵を打ち負かすだろう。

3つの法について（439-481行）

- 439 この読誦において語られていることは、簡潔に言えば、
440 「神が人にお与えになった3つの法について」である³⁸⁾。
441 第1の法は、知性と理性を持っている人に示されている。
442 それは、神を知ること、己の創造主を敬うこと、である。
443 なぜなら、知性を持っている人は自分でよく考えることができるが、
444 教育されてこなかった人や、他の人々はそうではないからである。
445 ゆえに、知性と理性を持っている人は、ここで知ることができる、
446 世界全体を形成した主である神が存在しており、
447 それを認めつつ、神を大いに讃えるべきだということを。
448 そして、神を讃えなかった人々は、地獄へと落とされた。
449 第2の法は、神がモーセにお与えになったものであり、
450 神を畏れ、よく仕えるべきだと、我々に教えてくれている。
451 神は、それに背いた全ての者を断罪し、罰をお与えになっている。
452 第3の法は、今、この時代にあるものであり、
453 善き心で神を愛し、正しく仕えるべきだと我々に教えてくれている。
454 神は、罪人を待ち、現世において悔悛できるだけに猶予を
455 その者にお与えになっている。
456 これから先、もう我々は他の法を手にするべきではないが、

457 イエス・キリストに付き従い、彼の望むことを行い、
 458 彼が命じたことをしっかりと守り、
 459 反キリストの行動や発言を信じてしまわないよう、
 460 来たる日のために、しっかり備えておくべきである。
 461 聖書によれば、今や多くの反キリストがいて³⁹⁾、
 462 彼らは皆、キリストに仇なす者だという。
 463 多くの徴や、偉大なる証しが
 464 これから裁きの日までに現れることだろう。
 465 天と地が燃えさかり、全ての生けるものが死に絶え、
 466 その後、全てが恒久の生のうちに蘇り、
 467 全ての建造物が崩壊してしまうだろう。
 468 その時にこそ、最後の審判が下されるのである⁴⁰⁾。
 469 聖書の記述の通り、神は人々を分別されるだろう。
 470 悪人どもには、次のようにお告げになる。「私の許から離れ、
 471 決して絶えることのない地獄の業火に身を投じよ。
 472 そこで、汝らは3つの過酷な状況を強いられるだろう。
 473 それは、多くの痛み、厳しい責め苦、
 474 未来永劫に地獄へ落とされることである」と。
 475 これより神は、その御意思によって我々を守って下さり、
 476 民衆に明かすことを、ほぼ同時に、我々にもお聞かせ下さる。
 477 神は、次のように仰る。「私と共に来なさい、父のご加護があらんことを。
 478 世界の始まりから、あなた方のために準備された、
 479 あなた方が歓喜、財産、名誉を得るであろう王国を手にしなさい」と。
 480 世界を作られた、あの主の御心のままに、
 481 どうか私たちが彼の王宮に留まれる選民でいられますように。

神に感謝いたします。アーメン。

注

- 1) MONTET, Edouard, *La Noble Leçon, texte original, d'après le manuscrit de Cambridge*, Paris : Librairie G.Fischbacher, 1888, pp.3-8. ; PAPINI, Carlo, *La Nobile Lezione : La Nobla Leïçon, Poemetto medievale valdese*, Torino : Claudiana, 2003, pp.32-36. 『崇高なる読誦』の成立年代は、19世紀を通して長らく議論の対象となった。Cf. 拙稿(2017)「中世ヴァルド派詩編『崇高なる読誦』の成立時期に関する諸主張」『リュテス』, 大阪市立大学フランス文学会, vol.44, 5-21.
- 2) Cambridge University Library にはヴァルド派写本が8本所蔵されており、それぞれに略記号として(A)から(H)の文字が当てはめられていて、当該図書館におけるヴァルド派写本を示す時には、C_A, C_B, C_C, C_D, などと表記する。
- 3) Mss.Dd.XV.30. (B), *La Nobla Leïçon*, Cambridge : Cambridge University Library.
- 4) Cf. TODD, James Henson, *The Books of the Vaudois: The Waldensian Manuscripts Preserved in the Library of Trinity College, Dublin*, London : Macmillan and Co., 1865.

- 5) Mss.Dd.XV.31. (C), *La Nobla Leyçon*, Cambridge : Cambridge University Library.
- 6) Mss.Ge.207., *La Nobla Leyçon*, Genève, Bibliothèque Publique et Universitaire.
- 7) Mss.C.5.21. (261), *La Nobla Leyçon*, Dublin : Trinity College Library.
- 8) RAYNOUARD, François, *Choix des poésies originales des Troubadours, Tome II*, Paris : Imprimerie de Firmin Didot, 1817, pp.72-102.
- 9) MONASTIER, Antoine, *Histoire de l'église vaudoise depuis son origine, Tome II*, Lausanne : Chez Georges Bridel, 1847, pp.246-269.
- 10) MONTET, *Op.cit.*, pp.23-71.
- 11) DE STEFANO, Antonino, *La Noble Leçon des Vaudois du Piémont : Texte critique, introduction et glossaire*, Paris : Honoré Champion, 1909, pp.1-54.
- 12) PAPINI, *Op.cit.*, pp.53-101.
- 13) 『崇高なる読誦』の成立年代と思しき数字が示されている箇所。Cambridge (B) 写本では「すっかり1400年が経ってしまった」Ben ha mil e 4 cent an compli entierament と記されており、「1400年」mil e 4 cent an という年代が見て取れる（ただし、写本ではアラビア数字の「4」の部分に何かで削られたような跡がある）。同じく、Cambridge (C) 写本でも「1400年」mil e cccc cent anz と表記されている。ただ、この2本よりも後の時代に作られたとされる Genève 写本では「1100年」mil e cent anz, Dublin 写本では「1100年」mil e cent an と表記されており、BRADSHAW が1862年に Cambridge (B) (C) 写本を確認するまでは、「1100年」が『崇高なる読誦』の成立年代だと信じられていた。
- 14) 「栄光」gloria は天国を、「苦悶」torment は地獄を表現しており、死後に人が辿るべき道を示唆していると思われる。カトリック教会の神学においては天国と地獄の他に「煉獄」の概念があるが、中世のヴァルド派は煉獄の存在を否定していたため、死後の世界は2つしか挙げられていない。ヴァルド派が煉獄を否定していたことは様々なカトリック教会文書内で確認できるが、一例として1260年から1266年頃にバッサウ司教区の名もなき修道士が記した『対異端ヴァルド派の書』*Liber contra Waldenses haereticos* の「煉獄」の項（3章28節）を挙げておく。Cf. GONNET, Giovanni, *Enchiridion Fontium Valdensium II*, Torino : Claudiana, 1998, pp.137-138. « III, 28: *De purgatorio*. Purgatorium negant dicentes tantum duas vias, unam electorum ad celum et dampnatorum ad infernum »（「煉獄について」[ヴァルド派は]煉獄を否定しており、選ばれた人は天国へ、断罪された人は地獄へ、という2つの道しかない」と述べている）。
- 15) 「2つの道」のモチーフについて、聖書における人類が辿るべき2つの道とは、申命記・第30章1節にある「祝福」と「呪い」、同第30章15節にある「命と幸い」と「死と災い」などが該当すると思われる。また、マタイによる福音書・第7章13-14節にある2つの狭き門——「滅びに通じる門」と「命に通じる門」——も同様である。
- 16) 創世記・第3章6節：アダムがエバから渡されて食べた実は、聖書において「りんご」とは明示されていない。しかし、『崇高なる読誦』においては« pom »と記されている。ラテン語の *pomum*, *pomus* は元来「果物」の意を持つが、5世紀初頭より北部イタリアのレト・ロマンス語地域やイベリア半島のイベロ・ロマンス語地域では、特に「りんごの木の果実」を指すようになった（後に *malum* に取って代わられる）。当該地域の一部には古オック語圏が含まれており、また古オック語と同時代に北部フランスで使用されていた古フランス語においても *pome*, *pume* が「りんご」を意味していたことから、ここでは« pom »の訳語に「りんご」を用いた。このように『崇高なる読誦』には、聖書とは異なる記述が複数散見される。MONTET (1888:12) や DE STEFANO (1909:LL-LII) も指摘しているが、こうした差異からは本作品の著者がウルガータ聖書全体を丹念に読み込んでいたわけではなく、口頭で聞き及んだり、当時のヴァルド派が有していた聖書の俗語翻訳およびその断片のみを参照するといった形で聖書に関する知識を得ていた可能性が浮かびあがる。
- 17) 創世記・第7章7節、同第6章10節／ペトロの手紙1・第3章20節／ペトロの手紙2・第2章5節：

- ノアの子は、セム、ハム、ヤフェトの3人がおり、それぞれの妻が計3人、ノア自身、ノアの妻の合計で8人となる。
- 18) 創世記・第11章4節：ノアの子孫たちが塔を建てた理由について、聖書には「天にまで届く塔のある町を建設して有名になるため」と記されているが、『崇高なる読誦』には「洪水から逃れるため」と記されている。
- 19) 「5つの町」cinc ciptas とは具体的にどの町を指すのか、聖書には明確な記載がない。申命記・第29章22節には、破滅した町の名前として、ソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムの4つが挙げられているため、これらは5つの町のうちに数えられている可能性が高い。なお、「5つの町」という記述については、イザヤ書・第19章18節／ルカによる福音書・第19章19節にも見られ、歴代誌（上）・第4章32節には、エタム、アイン、リンモン、トケン、アシャンという名称が挙げられている。また、滅ぼされた町という点では、マタイによる福音書・第11章20-24節／ルカによる福音書・第10章13-15節に、コラジン、ベツサイダ、カペナウムという名称が挙げられている。
- 20) 創世記・第19章1-29節：ソドムとゴモラの滅亡に関連した話で、ロトとその家族は神によって救われるが、逃げる途中に後ろを振り返ってはいけないと神に言われたにも拘らず、ロトの妻は振り返ったために塩の柱にされた。
- 21) 出エジプト記・第32章28節：聖書では「3,000人」と記されているが、『崇高なる読誦』では「30,000人」30 milia と記されている。
- 22) 出エジプト記・第32章27節：聖書では、雄牛の像を崇めていた民はレビの子らによって剣で殺されたことになっているが、『崇高なる読誦』では、剣だけでなく炎と蛇が追記されている。
- 23) 列王記（下）・第24章10-17節：バビロンの王ネブカドネツアルによる「バビロン捕囚」を指していると思われる。
- 24) マタイによる福音書・第1章18-25節では、天使がヨセフの夢に現れてマリアの懐胎を告げているが、『崇高なる読誦』には、ルカによる福音書・第1章26-38節に記されている大天使ガブリエルによるマリアへの受胎告知の場面が記されている。
- 25) マタイによる福音書・第2章1-2節：聖書では、東方の三博士といわれる「占星術の学者たち」の人数が「3人」とは明記されていないが、『崇高なる読誦』では「3人のマギ」li 3 baron と記されている。
- 26) マタイによる福音書・第5章17-48節：聖書では、イエスは法について「廃止するためではなく、完成するため」と述べているが、『崇高なる読誦』では「廃止する」の代わりに「変更する」mudar、「完成する」の代わりに「刷新した」renouvelle (renovar, renovar) という語が使われている。
- 27) マタイによる福音書・第5章3節：『崇高なる読誦』435行目にも同様のことが記されているが、「霊的な貧しさ」paureta sperital は、^{ウィタ・アゴストリカ}使徒的生活に基づく清貧を重視していた中世ヴァルド派の特徴の1つである。
- 28) マタイによる福音書・第26章14-16節：聖書ではユダの方から祭司長たちのところへ行って話を持ち掛けているが、『崇高なる読誦』ではユダが話を持ち掛けられる立場となっている。
- 29) 「2人のマリア」doas Marias について、マタイによる福音書・第27章56節にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリアの計2人が登場するが、ヨハネによる福音書・第19章25節にはイエスの母マリア、クロパの妻マリア、マグダラのマリアの計3人が登場する。
- 30) 原文では「nostra dona」と記されているが、訳文では「聖母マリア」とした。なお、Dublin 写本のみに「nostra dona」ではなく「Maria」と明示されている。
- 31) ヨハネによる福音書・第19章38-40節／マタイによる福音書・第27章57-60節：ここでいう「善人たち」li bon とは、アリマタヤ出身のヨセフとニコデモのことを指すと思われる。
- 32) 使徒言行録・第2章14節：使徒たちの頭上に炎のような舌が現れると、彼らは聖霊に満たされ、ほかの国々の言葉で話したというエピソードを指している。
- 33) 13世紀から19世紀半ばまで、ヴァルド派信者たちは自らを「使徒の後継者」と自負する傾向があった。

『崇高なる読誦』では、「迫害者たち」がカトリック教会の信者たちを、「聖人たち」がヴァルド派信者たちを暗示しており、二者の対立構造が描かれると同時に、カトリック教会の体制を批判する内容となっている。中世後期に迫害されていたヴァルド派は、原始キリスト教会の時代に迫害されていた使徒たちと、自らの境遇を重ね合わせていたと考えられる。

- 34) PARAVY, Pierrette, *De la Chrétienté romaine à la réforme en Dauphiné : évêques, fidèles et déviants (vers 1340 – vers 1530)*, Roma : École française de Rome, 1993, p.1126. によれば、373 行目にある « vaudes » というタームに関して、数ある中世ヴァルド派文書の中で「ヴァルド派」を指すと思しき具体的な名称が記載されているのは『崇高なる読誦』のみであるという。中世当時におけるヴァルド派という呼称はカトリック教会が用いていた総称であり、実際にヴァルド派と呼ばれていた人々の中には複数の分派が存在していたので、一枚岩の集団ではなかった。そして、彼らは「リヨンの貧者」や「ロンバルディアの貧者」といった呼称を個々に用いており、ヴァルド派という呼称は蔑視的であるとして忌み嫌う傾向があったという。そのため、373 行目にある « vaudes » という呼称は、偽キリスト者、つまりカトリック教会側の人間の立場から用いられていると考えられる。『崇高なる読誦』において « vaudes » は単数形の名詞として扱われており、これが「ヴァルド派」という宗派全体を指すのか、信者の 1 人を指すのか、あるいは当該宗派の創設者であるリヨンの商人ヴァルド Valdo を指すのか様々な可能性が考えられるため、本訳では敢えて特定の訳語を当てはめることはしなかった。
- 35) 新約聖書は死ぬ前の告解を命じてはいるが、「健全かつ元気なときに告白せよ」（387 行目）とは命じておらず、この部分には著者独自の解釈および創作が含まれていると考えられる。
- 36) Cf. 拙稿（2011）「偽りの神話——起源伝承にみるヴァルド派の集団意識について——」『リュテス』、大阪市立大学フランス文学会、vol.39, 3-22. 中世ヴァルド派は、13 世紀頃から 16 世紀半ばにかけて自らの起源に関する独自の伝承を有しており、その中に教皇シルヴェステル 1 世が登場するエピソードがある。シルヴェステル 1 世 Silvester I とは実在したローマ教皇（在位 314-335 年）であり、ハンセン病を患っていたローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世 Constantinus I に洗礼を施して病を治療したことから、その感謝の印として皇帝から西ローマ帝国の世俗的支配権を贈られたとされている（Cf. 『コンスタンティヌスの寄進状』 *Constitutum Constantini*）。この話にヴァルド派は独自の解釈を付加している。ヴァルド派の伝承によれば、シルヴェステル 1 世のときまで神聖なものだったローマ教会は、世俗的支配権の獲得以降に墮落してしまい、信仰活動を疎かにするようになった。しかし、一部の側近たちが教皇の許から離れ、ローマ教会とは別にキリストの真の教えを守るようになった。その側近たちの末裔こそがヴァルド派だというものである。ヴァルド派は秘蹟の人効論を説いているため、その立場からすれば、シルヴェステル 1 世以降の墮落したローマ教会には、罪を赦したり、赦免したりできる能力を持つ者はいないことになる（『崇高なる読誦』 411-413 行目）。
- 37) MONTET, Edouard, *Histoire littéraire des Vaudois du Piémont : d'après les manuscrits originaux conservés à Cambridge, Dublin, Genève, Grenoble, Munich, Paris, Strasbourg et Zurich*, Paris : Librairie G. Fischbacher, 1885, p.99. によれば、断食、施し、祈りといった行為は、当時のヴァルド派において、罪の赦しや罰の軽減を神に求めるための功德を積むのに重要な要素だった。中世ヴァルド派の説教師バルバ Barba（ピエモンテの方言で「小父」を意味する）たちがヨーロッパ各地を巡っての遍歴説教をする時には貧者に施しをしてまわっており、週のうち月、水、金、土の 4 日は断食をし、1 日のうち 7 回は祈りを捧げるなどの実践を積極的に行っていたようである。
- 38) 「神が人に与えた 3 つの法」とは、すなわち「自然の法」、「モーセの古い法（十戒）」、「イエス・キリストの新しい法（山上の垂訓）」が該当する。この 3 つの法については、聖パウロによってローマの信徒への手紙の中でまとめられており、第 1 章 18-32 節で自然の法、第 2 章と第 3 章 1-20 節でモーセの古い法、第 3 章 21-30 節と第 4 章でイエス・キリストの新しい法が言及されている。
- 39) ヨハネの手紙 1・第 2 章 18 節：反キリストの到来は「終わりの時」が来ていることを意味しており、冒頭でも触れられていたように、この詩に通底する黙示録的モチーフがここにもみられる。

- 40) 終末の接近, 反キリストの到来, 天地崩壊 (神の怒り), 最後の裁きという流れは, ヨハネ黙示録の記載内容と時系列が一致している。

参考文献

- DE STEFANO, Antonino, *La Noble Leçon des Vaudois du Piémont : Texte critique, introduction et glossaire*, Paris : Honoré Champion, 1909.
- GONNET, Giovanni, *Enchiridion Fontium Valdensium II*, Torino : Claudiana, 1998.
- MONASTIER, Antoine, *Histoire de l'église vaudoise depuis son origine, Tome II*, Lausanne : Chez Georges Bridel, 1847.
- MONTET, Edouard, *Histoire littéraire des Vaudois du Piémont : d'après les manuscrits originaux conservés à Cambridge, Dublin, Genève, Grenoble, Munich, Paris, Strasbourg et Zurich*, Paris : Librairie G. Fischbacher, 1885.
- MONTET, Edouard, *La Noble Leçon, texte original, d'après le manuscrit de Cambridge*, Paris : Librairie G. Fischbacher, 1888.
- PAPINI, Carlo, *La nobile lezione ; La Nobla Leiçon : Poemetto medievale valdese*, Torino : Claudiana, 2003.
- PARAVY, Pierrette, *De la Chrétienté romaine à la réforme en Dauphiné : évêques, fidèles et déviants (vers 1340 - vers 1530)*, Roma : École française de Rome, 1993.
- RAYNOUARD, François, *Choix des poésies originales des Troubadours, Tome II*, Paris : Imprimerie de Firmin Didot, 1817.
- TODD, James Henson, *The Books of the Vaudois: The Waldensian Manuscripts Preserved in the Library of Trinity College, Dublin*, London : Macmillan and Co., 1865.
- 有田豊 (2011) 「偽りの神話——起源伝承にみるヴァルド派の集団意識について——」『リュテス』, 大阪市立大学フランス文学会, vol.39, 3-22.
- 有田豊 (2017) 「中世ヴァルド派詩編『崇高なる読誦』の成立時期に関する諸主張」『リュテス』, 大阪市立大学フランス文学会, vol.44, 5-21.